魚山叢書覚秀本について

岩田宗一

はじめに

本稿は、大原勝林院[1]蔵魚山叢書覚秀本（以下「覚秀本」または「叢書」と云う）を紹介するとともに、この叢書の天台声明資料としての重要性について述べたものである。

筆者は寡聞にして未だこの叢書に関するこの種の紹介や研究の事例[2]を知らないが、かねてよりこの叢書が天台声明とその研究、なかんずく筆者自身の今後の声明研究にとって重要な基礎資料の一つであると見なしてきた。そしてこれにつぶさに触れる機会のあることを希っていた。もちろんこれまでにも部分的には接してきたが、今回、勝林院輪番・実光院主天納伝中師の特別の計らいにより、一九七二年八月と一九七三年八月の二回に亘り直接、全巻に接することができたことを感謝の念をこめて記したい。

叢書はいわば天台大原流声明の資料集成の事業は覚秀（一八一七～一八八二以降不明）以前にも宗淵（一七八六～一八五九）および秀雄（一七九九～明治初？）らによって行なわれている。覚秀はこれら先学の成果を基礎としたうえ、さらにこれに新しい資料を加えて全一九四巻（分冊をも一巻とした場合）としたものである。覚秀本の原本とも云うべき二つの集成のうち、秀雄本については筆者は未調査なので明確にはできないが、宗淵本や覚秀本のように整理編纂された叢書の形態はもっていないようであり、現在も勝林院にはかなりの量が蔵されているが、輪郭をつかむには今後にまたなければならない。また、宗淵本については、もともと全

七五巻が勝林院に所蔵されていたが、現在では勝林院に四三冊、浄蓮華院（多紀）に一二冊、他は分散欠損していて、やはり全容を把握することは容易ではなくなっている。したがってほぼ完全なかたちで保存されている覚秀本は貴重な存在といわなければならない。

覚秀については現在まで、あまり多くは知られていないが、秀雄の門下であって大原宝泉院に住していたことは「魚山声明相承血脈譜」（参考文献、資料参照）によっても知ることができる。また宗淵の命で、資料の書写を行なったり、貸与を受けたりしていることが「天台学僧宗淵の研究」（参考文献、資料参照）によっても知られる。没年は詳かでなく、覚秀本書写年代の最後である一八八二年（明治一五年）以後は不明である。

註

① 京都市左京区大原勝林院町に在り、現在は無住寺であるが輪番寺がその管理にあたっている。

② 昭和十年代に東京帝国大学資料編纂所が、つづいて昭和二十五年ごろから数年間を要して水原夢江氏がマイクロフィルムに収めているほか、「天台学僧宗淵の研究」（昭和三十三年刊）に覚秀本の存在を記しているなどの例はある。

一　構成概観

まず叢書がどのような構成をもっているかを概観してみることにする。

叢書全体は大きく六つの部分に分けられていて、それぞれ〈眼〉・〈耳〉・〈鼻〉・〈舌〉・〈身〉・〈意〉の名称をもっている。これらの各部分はそれぞれ同じ名をもつところの六つの筥（はこ）に収められている。各筥、つまり各部分は、最少三十巻、最大三十八巻から成っている。各巻には巻番号がつけられている。しかし、叢書全体の通し番号ではなくて、筥ごとに独立の巻番号をもつものや、数筥を連ねて通し番号をもつものがあるなど一貫していない。すなわち〈眼〉・〈身〉・〈意〉はそれぞれ第一巻からはじまるところの独立した巻番号をもっているが、〈耳〉・〈鼻〉・〈舌〉は、〈耳〉の第一冊を第一巻として〈鼻〉を経て〈舌〉の最後までの通し番号をもっているといった具合である。これに加えて〈別巻〉というのがある。すなわち〈耳〉を除く他の五つの筥には、同じ巻番号をもっているものが二冊ずつ幾組かあるのである。この叢書に巻外として添えられている〈目録〉では、この二冊のうち一冊は各筥内での一連の巻番号に組み入れられているが、他の一冊はこれとは別に掲げられている。これにならって便宜上、ここではこの別掲のものに〈別〉の記号をつけることにした。

ところで、叢書にはわずかながら欠本の部分がある。そ

のもっとも大きな部分は〈鼻〉の筥のうちの第三八・三九・四十・四一（耳からの通し番号）である。しかし、これは書写後に散逸または欠損したものではなくて、叢書成立過程で、その部分に書写する予定であった資料が、何らかの理由で書写されないままになっていたものと思われる。このことは現に勝林院蔵の他の声明本の中に、叢書に転写すべき旨を記した〈日光山妙音集―四巻〉が存在しており、さらに叢書目録のその部分に同四巻名が記されていることからも明らかである。したがって、実質的にはこれは欠本ではなくて、現存している原本を叢書の一部と見なしてもさしつかえないように思われるが、しかし叢書そのものについて云う場合には、やはり欠本扱いせざるを得ない。また同じ〈鼻〉の第五二巻〈声明用心集〉も欠本となっているが、これも勝林院に原本と見られる同書名のものが存在している。さらに〈身〉の第一九巻〈曼供故実・慈覚大師千年忌〉が欠本になっているが、これについては現在のところ、原本らしいものは見つかっていない。このようにみてくると、実質的には欠本は一巻だけといっても良く、この叢書はほぼ完全なかたちで保存されていると云うことができよう。

以上のことがらをまとめて示せば、つぎのようである。

○眼の筥二十巻（第一巻～第二十巻）
　別眼一五巻（第一巻～第一五巻）
○耳の筥三十巻（第一巻～第三十巻）
○鼻の筥三七巻（第三一巻～第六七巻）
　〈うち欠本はつぎの五巻〉
　・第三八・三九・四十・四一巻―いづれも〈日光山妙音集〉（原本は勝林院にあり）
　・第五七巻―〈声明用心集〉（原本は勝林院にあり）
　別鼻　一巻（鼻第五十巻と同番号）
○舌の筥二九巻（第六八巻～第九五巻）
　別舌　一巻（舌第九五巻と同番号）
○身の筥二九巻（第一巻～第二九巻）
　〈うち欠本はつぎの一巻〉
　・第一九巻〈曼供故実・慈覚大師千年忌〉
　別身　一巻（身第一三巻は上・下二冊に分かれているが、そのうちの下を別巻とした）
○意の筥二四巻（第一巻～第二四巻）
　別意　七巻（第一巻～第七巻）
計一九四巻〈うち欠本は六巻〉

ところで、このような構成と各筥の分類の上になんらかの意図が含まれているのであろうか。これを明らかにするために各筥に収められている資料のうちから、筆者が声明研究の上で重要と考え、かつ量的にもまとまりをもっているものをとり出してみたが、それはつぎのようである。

○眼〈「別」を含む〉
　四箇法要、修正会、例時作法、法華懺法、布薩、灌仏・涅槃・舎利・羅漢各供、大師供、讃、唱礼、如法経、五ヶ秘曲、極楽声歌・朗詠
○耳
　声明集、法華懺法、引声、五ヶ秘曲（とくに九条錫杖・長音供養文）、声明口伝・口決・聞書、教化集
○鼻〈「別」を含む〉
　口伝・口決、他流・他宗関係、楽理、雅楽・朗詠
○舌〈「別」を含む〉
　伽陀集、諸法会作法・次第、講式集
○身〈「別」を含む〉
　曼荼羅供作法・次第・記録、法則集、如法経
○意〈「別」は懺法講関係のみ〉
　堂・塔供養（舞楽・他宗のものも含む）、法華（御）八講記録、（御）懺法講記録

このまとめからもわかるように、部分的には講式や伽陀・懺法講関係を一ヶ所に集めるという具合に、ある程度意図的なところもみてとれるが、全体を通して見る限りでは、一貫した明確な編輯上の意図や体系といったものは読みとりがたいと云わなければならない。

二　収集内容

この叢書には、どのような資料が、どれだけ収集されているのであろうか。ここでは叢書の内容を量的な面でとらえようとするものである。このことを通じて、叢書成立時期において、どのような資料が存在していて、かつ蒐集可能であったか、そして当時、大原声明の中心的存在であったと思われる覚秀が、どんな資料を集めたか、すなわちどんな資料に収集価値があると考えたかということでもある。もちろん、このような問題を単に量的にとらえることは一面的にすぎるが、当時の天台声明の趨勢を伺ううえで、一つの素材を提供するものと考える。そこで、一応、明確な奥書をもっているものについて、これを十一項に分け、それぞれの収集点数をつぎに掲げてみた。

(1) 法会（要）関係
修正会（15） 例時作法（5） 懺法講（30）
法華懺法（17） 布薩（9） 引声（11）
大師供（8） 独行懺法（6） 仏名会（4）
如法経（22） 経供養（6） 講式（78）
堂・塔供養（8） 仁王会（3） 灌頂（5）
曼荼羅供（25） その他の法会作法等（24）

(2) 単独の声明曲
四箇曲（6） 四座関係（14） 錫杖（9）
三十二相（5） 伽陀（12） 教化（7）
讃（27） 長音供養文（12） 唱礼（6）
その他の声明曲（11）

(3) 声明集等
声明集（9） 法則集（3）

(4) 経類
梵網戒品（5） 経（3）

(5) 目録類
目録（2）

(6) 口伝類
口伝・口決・聞書（24）

(7) 楽理・論
音律・楽理（19） 論著（5）

(8) 宮寺関係
宮寺（2）

(9) 他流・他宗関係
他流・他宗声明（28）

(10) 雅楽・朗詠等
雅楽・朗詠（15）

(11) その他（2） 計 四七五

このうち、十点以上のものを上位から掲げれば、つぎのようである。

講式（78） 懺法講（30） 他流・他宗関係（28）
讃（27） 曼荼羅供（25） 口伝・口決・聞書（24）
その他の法会作法等（24） 如法経（23）
音律・楽理（19） 法華懺法（17） 修正会（15）
雅楽・朗詠（15） 四座関係（14） 伽陀（12）
長音供養文（12） 引声（11）

これを、ふたたびはじめの項にしたがって分けるとつぎのようである。

法会関係＝講式・法華（御）懺法（講）・曼荼羅供・如法経・修正会・四座関係・その他
単独声明曲＝讃・伽陀・長音供養文・引声
口伝・口決・聞書
音律・楽理
雅楽・朗詠関係
他流・他宗関係

以上のことから、この叢書の収集領域は広い範囲に亘っていることが解る。そのなかで、講式や法華懺法（講）関係がとくに多いが、それにはつぎのような理由が考えられる。すなわち講式についていえば、江戸末期まではひんぱんに行なわれた法会であるとともに、その式文は同じ講題でも種類が多く、また時に応じて新作されるなどしたため残される点数も多くなったものと思われる。また、法華懺法関係についていえば、朝廷関係で行なわれた〈御懺法講〉の記録が中心であることも記録が多く残されてきた要因の一つであろう。その他、曼荼羅供や如法経（写経会法則）に関する資料が多量に収集されているが、このことは、これらの法会が古今を通じて天台宗の主要な法会に属していることに因るものであろう。さらに特筆すべきは、天台以外の宗派のものが数多く集められていることである。その中には東寺・高野山・薬師寺・唐招提寺・西本願寺等の声明が含まれている。このことは、覚秀が真宗西本願寺の法式や声明の整備に関与したことや、「魚山声明相承血脈譜」の一本に、覚秀が堀川興正寺・仏興（光？）寺に門下を持ったことを記しているものがあることなどとともに、彼が他宗の声明についても強い関心と影響力をもっていたことを示している。

以上みてきたところでもわかるように、この叢書に収められている資料の内容は、全体として一定の傾向をもつのではなく、巾広い領域と豊富な曲や法会の種類によって満たされていると云うことができる。このことは、覚秀が前の二つの集成よりもさらに収集範囲を拡げようとした結果ともみられるが、いずれにしても江戸末期の大原の地には、声明資料を書写することへの、ただならぬ気概がみなぎっていたことを示しているように思う。

三　書写者の系譜

叢書に収められているところのどの資料についてみても、その成立時または最初の書写から数人の書写を経て覚秀の手にもたらされたことが解るが、ここでは天台声明関

係（一部分雅楽も含む）の資料について、そのような書写者や著者をことごとく挙げ、彼らがこの叢書に関与した件数を明らかにした。この中には著・書写の年代が不明のものでも、その人名が解って、かつ後世の書写の原本（出拠）となった資料の数も含まれている。（別表44頁〜45頁）

この他に書写の原本の所蔵場所（または者）として、つぎの名が登場している。

安部雅楽助	2	成自院	1	秀尚	1	宝生院	1	鷲尾隆安	1
班鳩寺	1	勝宝院	1	宝泉院	2	法深房	2	潦泉院	1
恵心院	1	勝林院	25	法曼院	1	明玄	1	楞厳院	2
円融院	1	盛淳	1	無動寺	1	理覚坊	1	来迎院	3
鶴林寺	1	尊円	1	様芸	2	吉水	1	大進律師	1
梶井宮	1	尊純	1	大原寺	6	大進律師	1	梨本宮	21
広海	1	尊勝院	2	南房	1	如来蔵	10	白毫院	1
洪空	1	大原寺	6	如来蔵	1	白毫院	1	八幡	3
讃門	1	大進律師	1	八幡	3				
南谷	4	梨本宮	21						
遮那院	1	南房	1						
秀孝	1	如来蔵	10						
秀実	1	白毫院	1						
正教坊	1	八幡	3						

なおこれらの他に、書写年代は明記してあるにもかかわらず、書写者名が欠落している箇所が一二四箇所ある。

以上の調査の結果、この叢書の各資料は、覚秀の手に至るまでにその名と年代が解っているだけで一七〇余人によって書写され、または著わされたものであることが明らかとなった。そこで、彼らの一人一人についての僧暦や業績を追って行くことは、天台声明とその歴史研究にとって重要な意義があると考えるが、ここではその中でもとくに魚山声明相承血脈譜に名を連ねているところの大原魚山声明正統の担い手たちが、この叢書にどれだけ関与しているかをみることとした。この血脈譜は、勝林院蔵の一本と、叢書所収のもの、および片岡義道師の〈天台声明〉所載のものを参考にしつつ、この叢書に関係のある部分のみを抜き出したものである。なお、良忍以前では、出拠として最澄と源信の著書が挙げられているのみであるから、これを省いた。

（　）内の数字は生没年または主要著書写年。（　）以外の数字は関与件数を示す。

書写（著）者と件数

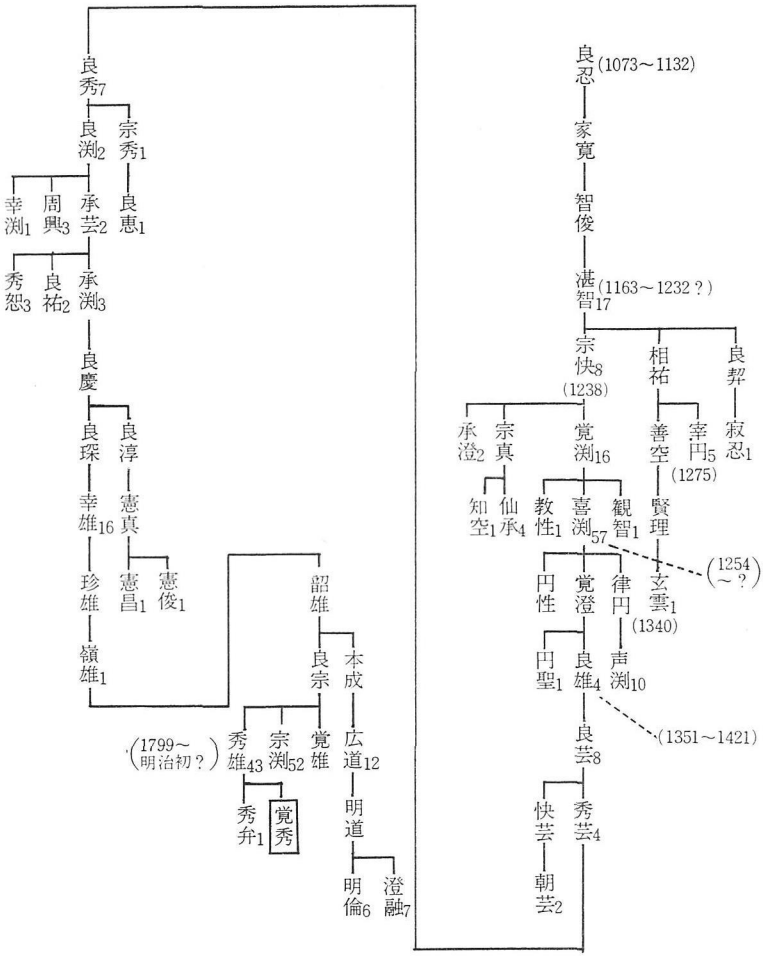
凡例；左から西暦，人名，件数（無記は1を示す）。

1212〜1214 仁玄4　この間に仁玄が4件関与（著・書写）したことを示す。

1192〜1226頃 湛智17　湛智が関与した17件のうち年代がわかっている両限を示す。年代不詳のものを含んでいる意。

812〜813	最澄	3
867	老道	
986	源信	
1146	行円	
1160	藤原為親	
1170	藤原親雅	
1185	凉全	
1185頃	信空	
1192〜1226頃	湛智	17
1208	良超	
1212〜1214	仁玄	4
1220	寂舜	
1222	成源	
1223〜1257	宗快	8
この頃	覚淵	16
1247	快恵	
1252〜1254頃	尊証	7
この頃	観智	
この頃	仙承	4
1255	舜忍	
1257〜1272	塔阿弥陀仏	2
1257	持寂	
1244〜1284頃	宰円	5
1268〜1284	頼慶	2
1268〜1319頃	喜淵	57
1270〜1271	円修	4
1281	承澄	2
1287	顕空	
1289	覚超	
1289	了敏	
1289	西園寺実兼	
1290	証忍	
1290	善光	
1294	相藤	
1296〜1308	経賢	2
1297	顕承	
1307	真海	
1311	恵助	
1314	淵誉	2
1315	観昭	
1317〜1340	玄雲	2
1320	賢勝	
1320	慈眼	2
1321	承海	
1321	道快	
1323	実豪	
1324	教正	
1329	聖淵	2
1329	玄淵	
1333〜1337	豪鎮	4
1335	教性	
1338	円聖	
1341〜1361頃	声淵	10
1344	賢昇	
1349	空知	
1349頃	教雲	3
1353頃	宗信	2
1357	恵仁	
1372	澄意	
1372	珍宗	
1373〜1375頃	良雄	4
1374	厳豪	2
1375	藤原朝臣	
1380	恵識	
1380	菅原和長	
1381	仁空	
1382	正叡	
1383	源恵	
1383〜1402	智運	4
1387	賢宝	
1397〜1436頃	弁覚	11
1399	了経	
1399	景淳	
1402	恵林	
1405	光幸	
1407〜1424頃	良芸	8
1408	（恩徳院常住）	2
1409〜1426	秀芸	4
1414	光暁	
1417	伝運	
1421	了周	
1424	英雄	2
1424	桂運	

1425	昌度
1429	照春
1431	玄覚 3
1431	弁空
1433	栄憲
1441〜1482	良秀 7
1447〜1451	朝芸 2
1449	実助
1450	性運
この頃	幸淵
1454	源喜 2
1455	弁宗
1456	海覚
1465	恵忍
1468頃	了祐 2
1473〜1475	猷清 2
1474	重淵
1474	頼憲
1478	尊憲
1481	頼円？
1482	宗俊
1487	宗秀
1488〜1501	藤原 2
1492頃	玄弁
1498	（宰相公）
1498	助円
1502頃	良淵 2
1504頃	周興 3
1505	賢久
1518〜1558 頃	祐運 4
1520頃	良祐 2
1521〜1546 頃	秀恕 3
1526	豪海
1526	頼等
1528	良恵
1534〜1538	承芸 2
1540	宥運
1550	西園寺円秀
1551〜1578	教盛 2
1559〜1568	存春 2
1562	源長
1562	慶等
1577	城賢
1578〜1579 頃	承淵 3
1583	実祐
1588	真祐
1592	光祐
1602	光芸
1610	定海
1612	鎮雄
1616	天海
1617	通村
1637	顕証
1639	良純 2
1640	周海
1641	尊賀
1646	澄真
1649	舜奥
1649〜1702	幸雄16
1652	玄性房
1654	円秀
1655	善祐
1660	尊如
1660	友伝
1662	高？寛
1668	頼延
1668	慈純 2
1673	憲俊
1675	覚映
1676〜1677	盛胤 2
1680〜1719	厳覚11
1683	元澄
1686〜1693	覚深 9
1686	憲昌
1692	禅林
1700	直同
1716〜1735	咸開19
1719	光栄
1727	嶺雄
1733	豪雲
1783	観公
1807	恵観
1809	実観 5
1812	源定
1812〜1851 頃	宗淵52
1813頃	真超 2
1814	恵明
1814	亮光
1816	普賢
1820〜1830 頃	広道12
1820〜1842 頃	秀雄43
1823〜1825 頃	豪実 3
1824〜1847	季良 4
1827	良乗
1831	秀弁
1833頃	盈源 2
1839〜1844 頃	明倫 6
1844	霊妙房
1847〜1848	澄融 7
1854〜1855	貫真 2


良秀7
良渕2
宗秀1
幸渕1
周興3
承芸2
良恵1
秀恕3
良祐2
承渕3
良慶
良琛
良淳
幸雄16
憲真
珍雄
憲昌1
憲俊1
嶺雄1
韶雄
良宗
本成
(1799～明治初？)
秀雄43
宗渕52
覚雄
広道12
秀弁1
覚秀
明道
明倫6
澄融7
良忍(1073～1132)
家寛
智俊
湛智17(1163～1232？)
宗快8
(1238)
相祐
良幹
承澄2
宗真
覚渕16
善空
宰円5
寂忍1
知空1
仙承4
教性1
喜渕57
観智1
(1275)
賢理
(1254～？)
円性
覚澄
律円
玄雲1
(1340)
円聖1
良雄4
声渕10
良芸8
(1351～1421)
快芸
秀芸4
朝芸2

この系譜とその件数からもわかるように、この叢書の資料はまず湛智にはじまると云って良く、彼につづいて記録者や著述者として後世の書写者たちに多くの原資料を提供し、自らも書写者として活躍した人たちに覚淵・喜淵・声淵をはじめ、宰円・仙承・良雄・良芸・秀芸・良秀らがおり、幸雄を経て秀雄・宗淵・広道・明倫・澄融らが大きな役割を果している。また、この血脈譜に列するこれらの人たちが、総計で三〇八件に関与していることは、叢書の資料的価値を判断するうえで重要な材料になるであろう。さらにこれら血脈譜には名を見ない人たちの中でも、とくに青蓮院の尊証7、鶏足院の円修4、豪鎮4、無障金剛院の弁覚11、来迎院向之坊の咸開19、実観5、豪実3といった書写家たちの功績も大きいと云わなければならない。そして彼らの年代の中間で、この資料を書写した多数の声明家たちの手によって、天台声明資料類聚とでも云うべき資料集成の成立が可能となったのである。

結　び

以上、構成・内容・書写者の三つの面から叢書を見てきたが、構成と内容では収集範囲の広さと種類の豊富さを指摘した。また書写者については約五六〇件のうち三〇八件が魚山声明相承血脈譜に列する人たちによっていることが明らかとなったのである。さらに叢書のうちの声明曲および口伝・口決・聞書類には、おびただしい〈博士〉が記されており、〈朱〉をもつものも少なくないなど、声明研究資料としての重要性は非常に高いと云わなければならない。そして、秀雄・宗淵本をはじめ、この叢書の直接の出拠となった原資料が、勝林院を中心とした大源寺一円にかなりの量、保存されていることは、両者の比較等を通じて、江戸末期の天台声明の姿を、より明確に把握する手がかりが残されていることを意味している。

〈参考資料・文献〉
魚山声明相承血脈譜　勝林院蔵
魚山声明相承血脈譜　魚山叢書覚秀本舌95
天台声明〈レコード解説本〉　昭和三十九年十一月一日　片岡　義道
天台学僧宗淵の研究　昭和三十三年九月十日　西来寺刊
音楽事典（声明関係項目）　全五巻　平凡社刊

（本学助教授、音楽）